

第5章 高野町の文化

各地区の祭りや行事

高野山 青葉祭り (春)

6月の第2日曜日に行われる青葉祭りは、空海の誕生を祝う祭りです。高野山の目にも鮮やかな青葉のなか、花御堂渡御や稚児行列、大師音頭行列、ねぶたなど、いろいろな催しが繰り広げられます。



高野山 ろうそく祭り (夏)

8月13日、戦国時代の武将や先祖のお墓が立ち並ぶ奥之院の参道に、約10万本のろうそくに火が灯されます。ろうそくの明かりに照らされた参道は、とても幻想的です。



ろうそくが並ぶようす

高野山 明神社秋季大祭 (秋)

空海が高野山を開くとき、山の神である丹生明神から土地を授かりました。高野山の壇上伽藍には丹生明神がまつられている御社があります。秋には土地を授かった感謝の意味をこめて、ふだんは勧学院に納められている神輿が壇上伽藍に運び出され、御社から街中を巡ります。根本大塔ではもち投げもあり、中学生、高校生など住民がたくさん参加してにぎわいます。



中学生にかつがれる神輿

高野山 修正会 (冬)

正月三が日には金堂と奥之院灯籠堂で、1月5日には根本大塔で、修正会が行われます。これは、新しい年が幸せで豊かな年になるようにお願いするもので、多くの僧侶が出席し、一同で祈ります。



金堂

花坂 鬼もみ (夏)

毎年8月15日に、花坂の鳴川神社で鬼もみが行われます。これは、わざわいを払い、住民の安全を祈るためのものです。また、雨乞いの儀式でもあります。鬼もみの「もみ」とは上下にゆさぶるという意味です。一人の鬼を大勢の若者が追いかけて捕らえ、その鬼を大きな「神の木」にのせて「もむ」祭りです。昔から行われていますが、いつ頃から始められたのか、明らかではありません。鬼



鬼もみ

細川 傘ほこ祭り (夏)

毎年8月16日に、傘ほこ祭りは細川の八坂神社で行われます。これは、東細川と西細川を含めた細川全体で行われる祭りです。直径2m近い大きな傘ほこと笹竹を持った鬼が境内を回り、雨乞いや疫病退散を祈ります。

傘ほこには1863(文久3)年6月の日付が、傘ほこの幕を入れている箱には1803(享和3)年10月の日付がそれぞれ記されていることから、すでに江戸時代末期にはこの祭りが行われていたと思われます。



傘ほこ



鬼



傘ほこ祭り

祭りでは、傘ほこの中に鬼が入り神前まで移動します。鬼は「ヨーソロイ」と言いながら扇子で笹竹を叩いて、傘ほこ神前を行ったり来たりします。最後に、祭りを見に来た人たちは、細川の区長から鬼の面を頭の上にささげてもらいます。

まつ 秋祭り (秋)

秋には、農作物の収穫に感謝する秋祭りが高野町内の各地区で行われます。祭りでは、神仏にお供えたもちのおすそ分けにもち投げが開催され、みんなが楽しめます。



半切り



西郷八幡神社

にしごう 西郷

西郷の西郷八幡神社では、半切りという、たらいの形をした底の浅い大きなおけに、たくさんのもちを入れ、神様に供えます。その後、もち投げが行われます。



湯川丹生神社

ゆかわ 湯川

湯川では、丹生神社と耳神社の境内から、旧湯川小学校校庭に向かってもちが投げられ、みんながおすそ分けをいただきます。



西又丹生神社 (西又神社)

あいのうら 相ノ浦

相ノ浦では、集落の人が太鼓や鼓などを使って合奏し、神子舞が行われます。



相ノ浦丹生神社

にしがみね、みなみ、はやし、ひらはら、かしはら 西ヶ峰、南、林、平原、檜原

西ヶ峰、南、林、平原、檜原では、5地区の氏神としてまつっている西又丹生神社（西又神社）で秋祭りを行います。神前には、塩サバが供えられ、神事が終わると焼いてみんなで食べます。



大滝丹生神社

おおたき 大滝

大滝の秋祭りでは、大滝丹生神社の本殿前から石段下に向けてもち投げが行われます。



上筒香丹生神社

つつが 筒香

上筒香や中筒香と下筒香では、それぞれの丹生神社で秋祭りが行われます。地域の人びとは、柿の葉寿司などのごちそうを持ち寄り、みんなで食べて楽しめます。神社では豊作を願ってもち投げも行われます。



中筒香、下筒香 丹生神社

ふき 富貴

東富貴と西富貴では、それぞれの神社で神事がとり行われ、神輿とだんじりが集落を巡ります。神輿は名迫明神社にも立ち寄ります。これは江戸時代に起きたききんで、名迫氏が年貢に苦しむ富貴の人びとを救ったことに感謝して始まったことです。

富貴の秋祭りのようす



だんじり



神輿

地域に残る昔話

～鳴川大明神～ (花坂)

花坂の氏神である鳴川大明神の御神体は、高野山の西から流れでる鳴戸川によって、花坂に流れ着いたといわれています。鳴川大明神は「白鬮明神」とも呼ばれ、高野山のお坊さんはこの神様に祈れば、講釈を免除されました。



鳴川神社

講釈

書物の内容や語句の意味などを説明すること



なるかわだいみょうじん 鳴川大明神、もんじゅだいぼさつえんぎ 文珠大菩薩縁起 (花坂地区)

～耳神さま～ (湯川)

湯川の丹生神社のそばに、耳神大明神が祭られています。耳の具合がよくない人は、「ぞうり」や「わらじ」を木の枝にかけて祈れば、よくなるといわれています。

ぞうり

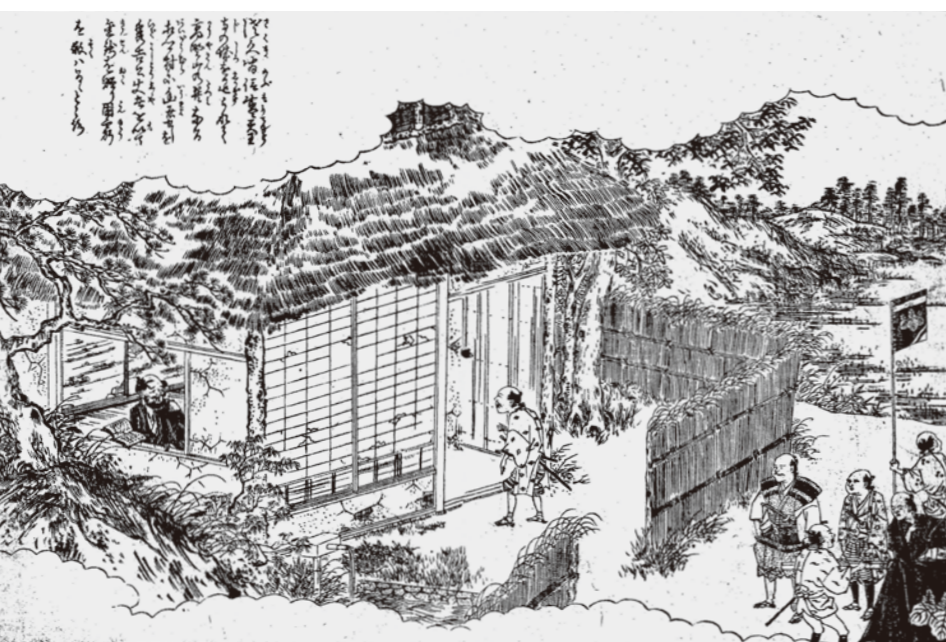
わらやい草などで編まれ、鼻緒をすげてある履物のこと

わらじ

足首を固定するわらおという長い紐が付いているもの



ほうのう 奉納された「ぞうり」や「わらじ」



さくまのぶもり やしき 佐久間信盛の屋敷のようす 「紀伊国名所図会」より

～佐久間信盛～ (相ノ浦)

織田信長(1534～1582)の部下であった戦国時代の武将佐久間信盛(1528?～1582)は、信長を怒らせたことにより、追放された高野山で暮らすことになりました。しかし、奉公人が仕事をやめて去ってしまったため、高野山を出て相ノ浦でしばらく移り住んだようです。

～大滝～ (大滝)

高野山高室院には大聖阿闍梨という、みんなの幸せを願って人びとのところへ行き、幸せを祈ったお坊さんがいました。このお坊さんは、弁財天女が姿を変えたものといわれていました。

あるとき、天女や弁財天、十五童子が宝船に乗って空からお坊さんのところに下りてきて、たくさんの宝物を持ってきました。帰るとき、十五童子のうち、印鑰童子ひとりだけが、高野山の南にある大滝に留まりました。それ以来、土地の人たちは大滝に弁財天をおまつりするようになったといわれています。



おおたき 大滝



ぜんによりゅうおうどう 善女龍王堂 (昔の弁財天社)

～細川の御鬮石～ (細川)

八坂神社には江戸時代からある「御鬮石」が残されています。この石を持ち上げたとき、重さの感じ方によって、お願いしたことがかなうか、かなわないかを確かめることができるといわれています。



～神谷のにぎわい～ (西郷)

昔、神谷には、昼食をとったり休けいをしたりする宿屋がたくさんありました。花屋、花のや、花市といった宿屋があり、中でも花市は200人もの人が宿泊できたようです。

高野山で法要を済ませた後の精進あげのようすを「高野



かみや 神谷を通る京大坂道

は清浄心、神谷は花屋、河根の布袋屋のおかのさん、高野雪ふりや、神谷はあられ、河根はきよめの雨がふる」と、歌っていたと古老がいい伝えて



かみや 神谷のようす

つえがやぶ いど つえがやぶ
 ~杖ヶ敷の井戸~ (杖ヶ敷)

杖ヶ敷では水をくむために谷まで行かなければならず、不自由をしていました。その杖ヶ敷で、空海は杖の先を使って井戸を掘り当てました。その井戸水は清らかで、「加地水」と呼ばれています。そして、不思議なことに空海が投げ置かれたその杖から枝葉が出てきて、ついには敷になったといわれています。ここから杖ヶ敷の名が付いたといわれています。



弘法大師空海をまつる祠
 「谷の井のお大師さん」

かじすい
 加地水

神仏の不思議な力で病気を治したり、災いを除くことができる水のこと



東又からの風景

ひがまた ふだ ひがまた
 ~東又のお札~ (東又)

節分のときに、悪者が東又へ入ってこないように「オニ」というまよけのお札を作りました。それを水にぬれないように、わった竹の中に入れて、東又への入口各所に立てました。

こやすじぞう かしはら
 ~子安地蔵~ (檜原)

檜原の子安には地蔵堂があり、子安地蔵と呼ばれています。子安地蔵は妊婦の安産を守ってくれるそうです。昔、お盆には、たくさんの方が集まって、地蔵の周囲を回りながら踊ったようです。



地蔵堂 (檜原 (子安))

おど はやし みなみ にしがみね
 ~へこなし踊り~ (林、南、西ヶ峰)

林、南、西ヶ峰地区では、へこなし踊りという盆踊りがありました。この踊りは近くの町村にまで名が知られ、高齢者も若者も、男性も女性も遠くから集ってきて、夜明けまで踊り続けたそうです。

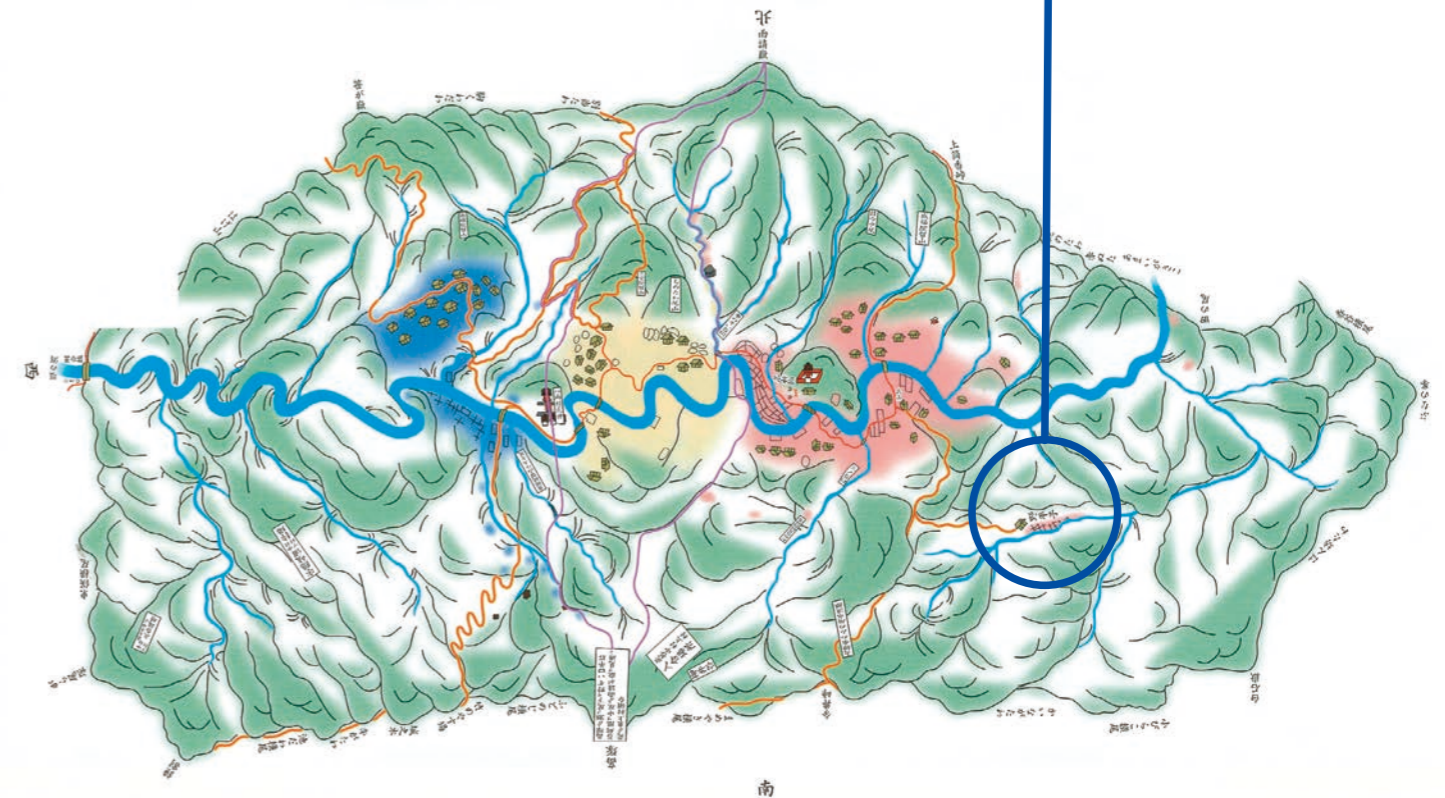
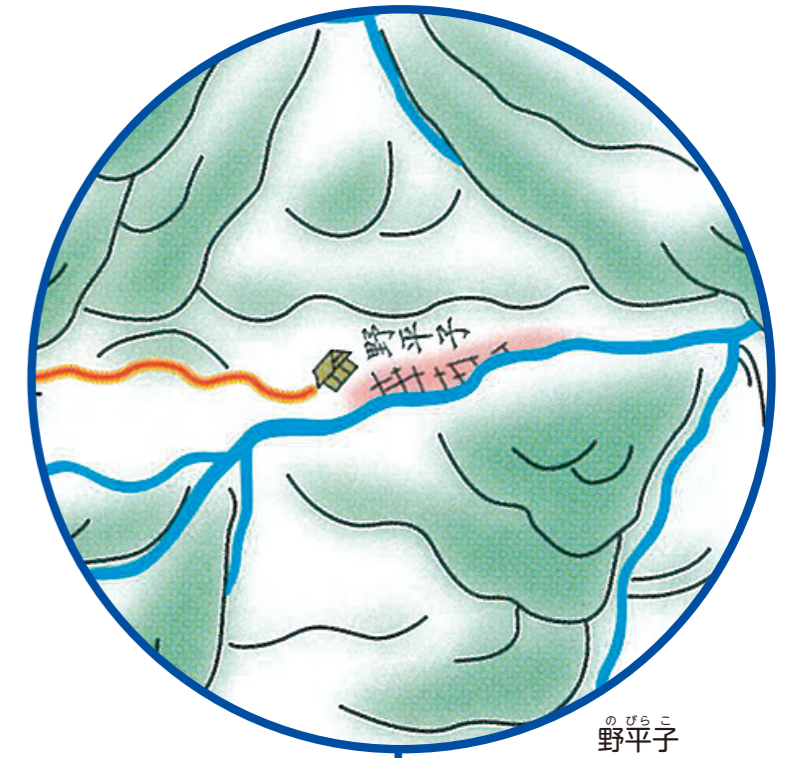
深い谷やけわしい山があるこれらの里には、源平の戦いで敗れた平家の人たちが逃げてきて、住み着いたそうです。この踊りは、これらの里にかくれ住んだ平家の人たちが、平家が再び栄えるようにとの願いをこめて始められたものだといういい伝えがあります。

のびらこ かみつが
 ~野平子~ (上筒香)

上筒香の集落から南の方向に白石谷があり、そこから少し上流に優女が滝があります。4メートルほどのゆるやかな滝で、大昔、丹生明神がこの滝をお登りになられた、顔を洗われた、といわれています。その少し上手には、野平子(古)という盆地があり、筒香がここから始まったといわれています。

享保十四酉年
 高野領筒香三ヶ村立合際目朱引
 扣絵図

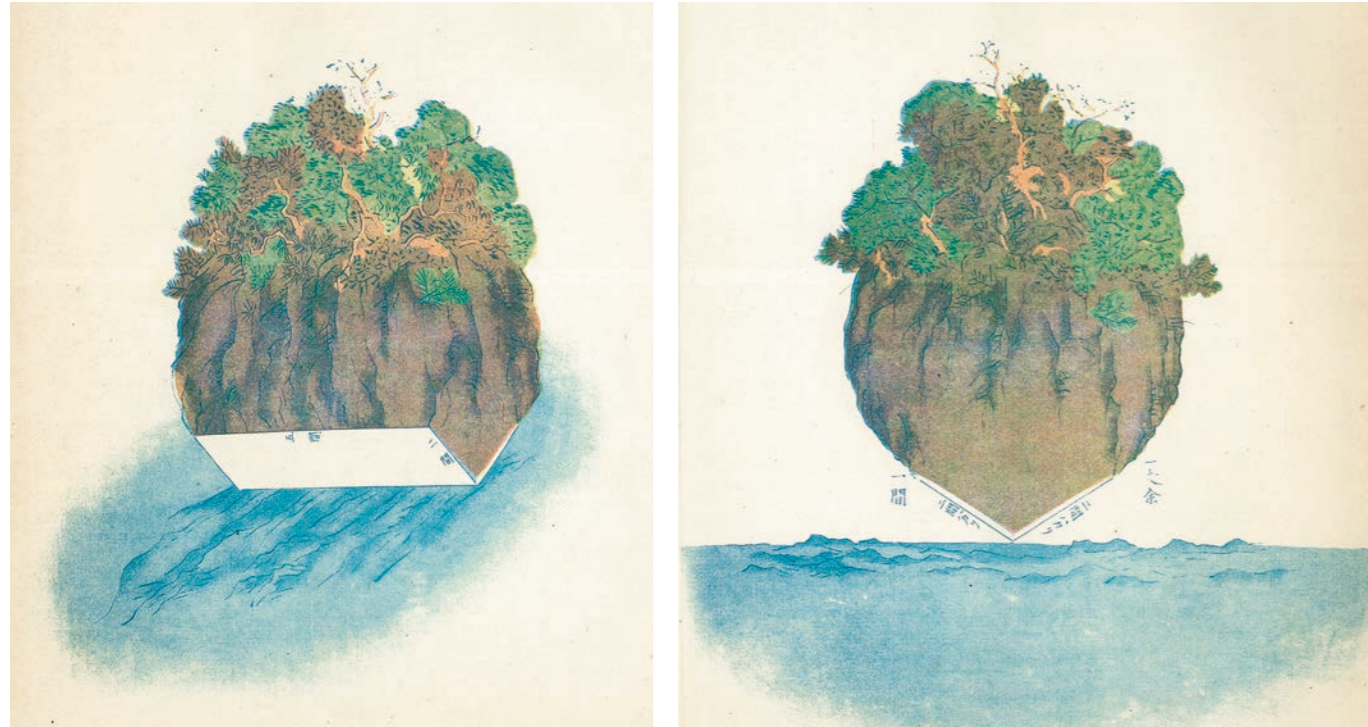
● 此色境目筋
 ● 此色道
 ● 此色下村 (下筒香)
 ● 此色中村 (中筒香)
 ● 此色上村 (上筒香)



1729 (享保14) 年の筒香の絵図 (上筒香区有文書)

～明神岩～ (下筒香)

狩場明神が馬に乗ってやってくる途中、大蛇に追われ小さい石の上に乗りました。「わしの命を助けてくれ」とおがんだところ、その小さな石がむくむくと大きくなり、大蛇に食べられずにすんだそうです。その石が明神岩です。岩にあるくぼみは、狩場明神が乗った馬の足あとだといわれています。




明神岩『紀伊統風土記』より

～富貴の年貢～ (富貴)

富貴は高野山の寺領でした。富貴の人は納める年貢米をかついだり背負ったりして、汗を流しながら高野山へ運びました。しかし、納めた年貢米が足りないことがありました。それは、高野山では富貴の枡よりも大きい枡を使っていたからです。再び長い道のりを歩いて戻り、仕方なく足りない分を納めたそうです。高野山は領地を治める力が強かったため、「泣く子と地頭（高野山）には勝てない」といい伝えられていました。

高野枡
 室町時代頃の**高野山麓**で使われる枡は、**地域**によって多種多様の大きさでした。
 1396 (応永3) 年、高野山寺領の**官省符荘** (紀伊国伊都郡にあった高野山の**荘園**のこと) では、枡に入る量を統一するため、この**荘園**で使う共通の大きさの**高野枡**が作られました。



～西行 (1118年～1190年)～

西行は武士であり、僧侶、歌人でもあります。長らく高野山に滞在したといわれています。昔、壇上伽藍の蛇腹路の西側に**霊山院**というお寺がありました。西

行はそこに住み、毎日近くの**三昧堂**に通ってお勤めをしていたそうです。三昧堂前の**ヤマザクラ**は西行が手植えしたといわれ、「**西行桜**」と呼ばれるようになりました。毎年見事な花を咲かせています。



西行桜

～豊臣秀吉 (1537年～1598年)～

豊臣秀吉は戦国時代から**安土**、**桃山**時代にかけて活躍した**武将**です。1594 (文禄3) 年、秀吉は亡き母の**三回忌追善供養**のために、**高野山**を訪れました。高野山からの帰途は、**高野参詣道黒河道** (黒河道) を通ったと伝えられています。黒河道は高野参詣の**主要な道**のひとつでした。黒河道には、秀吉が馬で駆け下りたといわれる「**太閤坂**」や**丹生川**を馬で渡ったとされる「**太閤の馬渡し**」、馬の沓を履き替えたといわれる「**沓場**」などが**伝承**されています。

～松尾芭蕉 (1644年～1694年)～

松尾芭蕉は**俳人**です。「**父母のしきりに恋いし雉子の声**」という句を残しています。**奥之院参道**にその句碑があります。1688 (貞享5) 年、父親の**三十三回忌**を終え、高野山にやってきて、父親や母親のことを思い起こして詠んだといわれています。



芭蕉句碑

～斉藤茂吉 (1882年～1953年)～

斉藤茂吉は**歌人**です。1925 (大正14) 年に高野山にやってきました。**奥之院の護摩堂**にある**厄除けのお大師様**といわれる**木像**を見て、「**空海のまだ若かりし像を見て われ去りかねき 今のうつつに**」と詠んだといわれています。

～谷崎潤一郎 (1886年～1965年)～

谷崎潤一郎は**小説家**です。1922 (大正11) 年と1931 (昭和6) 年に高野山に滞在しました。滞在中、『**盲目物語**』を執筆したそうです。また、**金剛峯寺**での**盆踊り**に参加して楽しんだともいわれています。

高野町の文化財

2021（令和3）年5月31日現在、高野町には272件（国指定208件、県指定42件、町指定2件、国登録20件）の文化財が指定、登録されています。重要文化財のお堂も多く残され、仏像や仏画など信仰に関連する美術工芸品も多く受け継がれています。



不動堂（国宝）

これらの文化財のほとんどが、高野山に残されています。これは、空海が高野山を開いてから、信仰が長く受け継がれ、土地が整えられ、山林が守られてきたからです。

大切な文化財を火災から守るため、お堂の周りにはドレンチャーという消火設備が設置されています。また、毎年文化財防火デーには消防車による啓発パレードや壇上伽藍での消火訓練などが行われ、日頃から火災に備えられています。

消火設備ドレンチャー作動のようす



御影堂



不動堂



蓮池への放水



啓発パレード



孔雀明王像（一躯 木造 鎌倉時代 金剛峯寺）（重要文化財）



花坂の御室御陵（静覚入道親王の墓所）伝承地（高野町指定の文化財）

静覚入道親王（1439年～1503年）は、室町時代後期の親王（天皇の子）です。応仁の乱による戦乱と荒廃から逃れるため、高野山の光臺院に入りました。その後、花坂に住み生涯を閉じたといわれています。

孔雀明王は毒蛇を食べるといって孔雀を尊厳化した明王で、災いを退け息災・安楽をもたらすといわれています。



阿弥陀聖衆来迎図（三幅 絹本着色 平安時代 有志八幡講）（国宝）

阿弥陀如来をはじめとする諸尊が飛雲に乗り、往生者のもとへ来迎するようすが描かれています。

資料

金剛峯寺

金剛峯寺は高野山真言宗の総本山の寺院です。1869（明治2）年に豊臣秀吉が建立した青巖寺と興山寺が合併し、寺号を金剛峯寺と改められました。境内の東半部には旧青巖寺の建物が残っています。旧青巖寺を構成する建物は大主殿、奥書院、経蔵、鐘楼、真然堂、護摩堂、山門、会下門、かご堀の9棟があり、これらは和歌山県指定有形文化財となっています。



金剛峯寺

高野山霊宝館

高野山霊宝館は1921（大正10）年に開館しました。国宝、重要文化財、和歌山県指定文化財など約8万点が収蔵される博物館施設です。公益財団法人高野山文化財保存会が運営しています。



高野山霊宝館

1961（昭和36）年には大宝蔵と呼ばれる収蔵庫が増設され、1984（昭和59）年、2003（平成15）年と続いて、近代的な収蔵庫が設立されました。

紫雲殿、玄関・北廊・中廊、放光閣、南廊及び西廊、宝蔵は、1998（平成10）年に国の登録有形文化財になりました。

高野山霊宝館は「山の正倉院」と称され、2021（令和3）年には創立百周年を迎えました。

登録有形文化財
登録有形文化財は、文化財登録制度に基づいて、主に近代に建造、製作された建造物のなかで、50年を経過し一定の評価を得たものを文化財として国が登録し、保存や活用が促されるものです。

高野町郷土資料室

高野町郷土資料室には昭和50年代から収集された高野町内の民具約600点が、民俗資料として保管されています。大きいものでは木製の消防ポンプやふいごなど、小さいものでは皿や徳利などがあります。また、いろいろな大きさや形のノコギリもあり、用途による違いがわかります。さらに、名迫家文書も保管されています。2000（平成12）年度から始まった町史編纂事業において、富貴の名迫家文書の調査が行われました。調査後、名迫家文書は高野町に寄贈されました。約7,000点もの古文書が保管されています。富貴の歴史がわかる大切なものです。



高野町郷土資料室



せん

のこぎり



名迫家文書

高野山大学図書館

高野山大学図書館は1898（明治31）年に創設されました。現在の図書館は、1929（昭和4）年に完成したもので、設計は「関西近代建築の父」と呼ばれる武田五一氏によるものです。この他に、武田氏は壇上伽藍にある根本大塔や金堂の設計も行いました。この図書館は1998（平成10）年に国の登録有形文化財に登録されています。



図書館全景

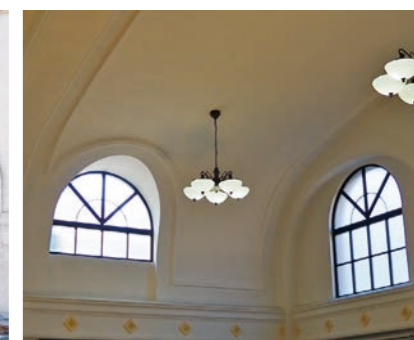
高野山大学図書館は、約30万冊の仏教書を収蔵し、公開しています。そのうち約10万冊は、各地の寺院から寄託・寄贈されたものです。



閲覧室



入口



図書館の天井